まちづくりに関する提案①
写真・絵画を通じて街を語る会

街に生きる市民として、街という環境は共通の資本、社会資本として存在している。

まちづくりの提案はそうした物的施設を住民が住みよいように設計企画するものであろう。ここでは物的施設はそのままにして当たらずに、視覚的感覚的に享受することによって利用するものとして、その利用の仕方がひとびととの結びつきをつくる。いわゆる社会関係資本の形成方法として、ソフトウェアの提案を行ってみよう。

街の風景・景観を写真に撮る。絵画に制作する。その写真・絵画作品を一定の会場に展示してもらう。そしてその結果を作家たちにスピーチとして語ってもらう。またワークショップを開き、写真・絵画に内包されているドラマを自身の心象として語り合う。さらに児童、生徒に同じようなことをスピーチしてもらい、そのコンテストをイベント企画してみよう。こういう提案である。

我々は街の中に生きているが、街の風景や景観またさらに自然のそれらも含めて、案外見るようで見ていない、感じることができるのに感じないことがあるのではないか。

芸術家の優れた作品は、世界の中にある美しさや何かを、明瞭に具現することによって我々に感じる力や目を与えてくれる。自然や街の中の部分に、部分としての限界はあっても、芸術作品が抽出したセンスを感じるようになったりする。また、我々は写真や絵画作品を通じて、よく見えにくい部分、感覚的な部分以外のドラマなどふくめ、作者から解説されることによって、新しいセンスを獲得したりする。

このようなことから、作家たちと出会おうとするイベント企画が生れる訳である。

自作を語る作家たちのスピーチは、市民をこのような点から啓発する話を含むべきであろう。ビデオにとり、録画フィルムがプロジェクターで多くの市民に視聴できる形式がよいだろう。

ワークショップ形式のミーティングでは、参加者は自由に発言したり、また、よく練られた内容をふり分けて話す俳優のように演じ、ビデオ形式として、作家の制作談とあわせ、人間的興味に富むと同時に、市民のセンスを啓発するものが望ましい。

児童・生徒たちは、展覧会を見学し、作家たちのスピーチやワークショップのビデオを視聴したあと、自らのテーブルスピーチを五分程度にまとめ、その発表形式はコンテスト大会とし、作家たちや市民の前で実演する。ビデオを録るが、一部印象的なものを選び編集するものとする。大会記録映画の製作である。

このようなものが、この提案の具体的なデッサンである。

ひとびとは、街の共通の財産を結びつきの手がかり・素材として結ばれ、このイベントを通じて、街と関係者のつながりを確認する。

ビデオや実演そのものを通じて、市民のセンスが啓発されれば、その人にとって、街は新しく生れ変ったものとして感じられ、物自体は変わらなくても、ひとを通じて、世界の

感覚と意味が変るのである。社会資本は、新しい附加価値を市民に分配する結果となる。
　ひととひとがバラバラでなく生れ変った結びつき（ＴＩＥ）をつくること、社会情勢の色々の波と姿がこのことを要請している。
　「写真・絵画を通じて街を語る会」が実行され、成功することを願っている。